

5 遠隔高等教育は教育効果をあげるのか？

吉田 文

どのようなメディアを用いようと遠隔教育は、時間ないし空間の非同期性という点で、教室における対面式の授業とは区別される。遠隔教育は、遠隔教育機関が比較的廉価に設立可能であること、また、教育機会を社会階層的にも地理的にも拡大できることが、最大のメリットないしインセンティブとされ、遠隔教育に関する多くの研究もその線にそって、すなわち、コストや教育機会といった教育のインプットに関しておこなわれてきた。

他方、遠隔教育のアウトプットは、インプット面でのメリットと対照的に、果たして対面式の教育と同等以上の効果をあげられるのかという意味で、ややネガティブにみられてきた。自学自習を基本とするために、学生がどのように学習するか、途中で脱落しないか、修了したとして理解度は充分かなどといったことがら、関係者の危惧として表明されてきた。

こうした遠隔教育のアウトプットに関して検証したこれまでの研究にどのようなものがあるか、そこでの知見は何かをとりまとめたレポートが、アメリカ、ノースカロライナ州立大学のトマス・ラッセル氏によって発表されている。

(Thomas L. Russell (1997) The “No Significant Difference” Phenomenon as Reported in 248 Research Reports, Summaries, and Papers, North Carolina State University)

ここには、1928年から1996年までの遠隔教育の効果に関する研究がリストアップされ、かつ、それぞれの結論部分の数行が引用されている。ここで集められた論文が、何を結論としているかは、レポートのタイトルをみれば一目瞭然である。遠隔教育と教室型の対面授業との間には、学生の学習到達度に関してNo Significant Difference（有意な差がない）だというのである。

このレポートがどのような趣旨で編集されたのかについては記載されておらず、すべての研究において差がないという結果が得られなかったのか、あるいは、差があるという研究が意図的に排除されているのかはわからない。しかし、アメリカにおいて遠隔高等教育の効果に関してこれだけ多くの研究がなされていることは、教育効果の問題がいかに議論の対象となっているのかを知ることができ、また、遠隔教育でどのようなメディアが用いられてきたのかというアメリカにおけるメディア史としてみることもできる点が興味深い。印刷教材からはじまって、ラジオ、テレビ、80年代からは双方向性をもつテレビ、ビデオが登場しはじめる。一方向性から双方向性への動きは、対面方式の教育こそある意味で理想とされている理念の実現とみることができるし、90年代にはいるとコンピュータとネットワーク技術の発達、CMCやWWWの利用となってあらわれている。

われわれにとって有益なのは、アメリカにおける遠隔教育の有効性を知ることでもメディア史を知ることでもない。わが国において、遠隔教育の効果を測定する研究を行なうとしたら、どのような方法が可能なのかを考えるうえで大いに役に立つのである。

閑話休題。こうした研究をレビューしての印象である。遠隔教育の効果といったとき、どの議論も学生の学習面だけに集中し、対面式の授業ならば必ず問題となる教授・学習過程の教授の側面、すなわち、教員がどのように教えるか、それが教育効果に結びつくのかという問題は、これらの議論からは捨象されている。確かに、遠隔教育においては教授過程が見えにくく、学習の失敗は容易に個人化される。とはいえ、メディアを介在させた場合、教授過程は学習過程にどのような影響を与えるのか、それが教育効果にどのような関連をもつのか、そうした視点や切り口を持つことは、高等教育のアカウンタビリティが問われている現在、遠隔高等教育についても必要になるのではないだろうか。